

## 荒野へ

奈良 敏行（笈の定有）

本に書かれていることは必ずしも現実ではない。しかし時に、「これがなぜ現実であってはならないのだろう」と確信する人が現れる。そのようにして書物は、人の夢を、望みを継走する。そうであるならば、やはりそこには確かな現実が存在する。

『荒野へ』というのは登山家でもあるジョン・クラカワのノンフィクションだ。クリス・マッカンドレスという、二十代半ばの若者の、一九九二年の遭難死を詳細に追跡する。結末から遡るようになってしか語られない人生もあるのだ。

クリスには現実が虚妄に思えた。真実はここにしかない。とクリスに確信させた書物は、ジャック・ロンドンの『荒野の呼び声』だった。荒野はアラスカ・ユーコン川にあった。〈荒野へ〉というのが当時の若者たちの初発衝動であ

りオプセッションであったのだが、作家クラカワはこう述べる。

《ロンドン自身が北極地方で冬を過ごしたのは一回だけであり、四十歳のときには、カリフォルニアの私有地で自殺しているのだ。》

この事実によくの若者は目を向けなかった（自殺には諸説ある）。

ロンドンに『火を熾す』という短編がある。火を熾せない話だ。主人公はユーコン川からはずれ彷徨する。周囲は零下五十度、方向感覚も失われる。野営して火を熾さなければならぬ。思考が曖昧となり、火を熾すために手袋を外す。瞬間、指は凍てつき麻痺する。もがきながら結局火を熾せずに凍死する話だ。多くの冒険家はこのように孤独な最後を迎える。しかし、若者は自分だけは大丈夫だと己を恃むところが強い。

『荒野へ』の主人公クリスは、アラスカのデナリ国立公園の境界近くの開墾地で餓死する。数日後、通りかかったヘラジカ狩りなどのグループに、発見される。凍死ではないが、クリス・マッカンドレスは、毒性の植物の食中毒で野外に食料を確保できず餓死したのだ。冒険家の孤独な衰弱死は痛ましいが、若者を惹きつけてやまない。衰弱の物語なのにあたかも英雄譚のように語り継がれる。これも

「いのちの火」を熾せなかった物語なのだ。

大学を卒業し家出同然に出奔し、二年後の餓死だ。この迷いのない一直線の人生に多くの若者は心を揺さぶられる。行方不明の若者は多く、クリスの顛末は貴重な記録となつた。

クリスは富裕な家庭に生まれた。父は宇宙開発の技術者で著名人。しかし父は裕福な家に生まれたわけではない。この歪みはあんがいアメリカの多くの若者に共通なものかもしれない。アイデンティティのねじれを生成する。

クリスは父を憎む。父の不実な過去を憎む。愛憎の表裏するところだ。

若者たちは豊かさを憎み、ゼロからスタートしたいと狂つたように願望する。しかしそれはじつは父たちの体験を体験したいということなのかもしれない。

多くの若者は無防備でアラスカに向かう。荒野へというのが熱狂の向かう先なのだ。そしてぞくぞく行方不明になる。

一人の友人の証言がある。

《クリスは全力の疾走で背負つて運べるもの以外はなんも所持すべきでないという主義でした》

アメリカは不思議な国だ。貨物列車に無賃乗車したり、ヒッチハイクで車を乗り継ぐことができる。砂漠に住むわ

ずかな人々は、純粹な孤独の中で旅人を歓待する。そして旅人の冒険話に耳を傾ける。ハイウエーの孤独なドライバーも、そのようにして旅人たちを拾う。

クリスは路上の冒険の延長で山へ向かう。リュックは走るのに適度な重さしか実装しない。素手でアラスカを征服するのが究極の冒険なのだ。お金も燃やしてしまう。食料は山で調達する。地図さえも捨てる。

《一文なしで、つぎの食事のために食べものをあさりまわる。そういうとき、ぼくの日々はわくわくしたものだ》

クリスの手紙の一部だ。

条件が整つていけば、けして遭難するようなコースではない。かつてはバスがかよう道路もあった。現に廃棄されたバスが道ばたに転がっている。山小屋代わりに利用されているそのバスのなかでクリスは餓死したのだ。理由は衰弱のために食料が調達できなかったのだ。

大学を卒業して二年後の遭難だった。クリスは生きて戻り、この通過儀礼を果たせたら、ありあまる才能を活かして、本当の人生をはじめてスタートさせようとしていた。その途上の物語なのだ。

しかし人生の新しい幕は、上がることはなかった。永遠の途上の物語が残っただけだ。

途上の物語は魅力的だ。クリスの三倍の人生を生き続けるわたしも、何度でも反復する途上の物語を生きてみたい。火を熾すのだ、書物の中の〈荒野〉を求めて。

2025.05.29

ロンドン・深町真理子 『野生の呼び声』 光文社古典新訳文庫  
2007

ジャック・ロンドン ・柴田元幸 『火を熾す』 スイッチ・パブ

リッシング 2008

ジョン・クラカワー ・佐宗鈴夫 『荒野へ』 集英社文庫 2007